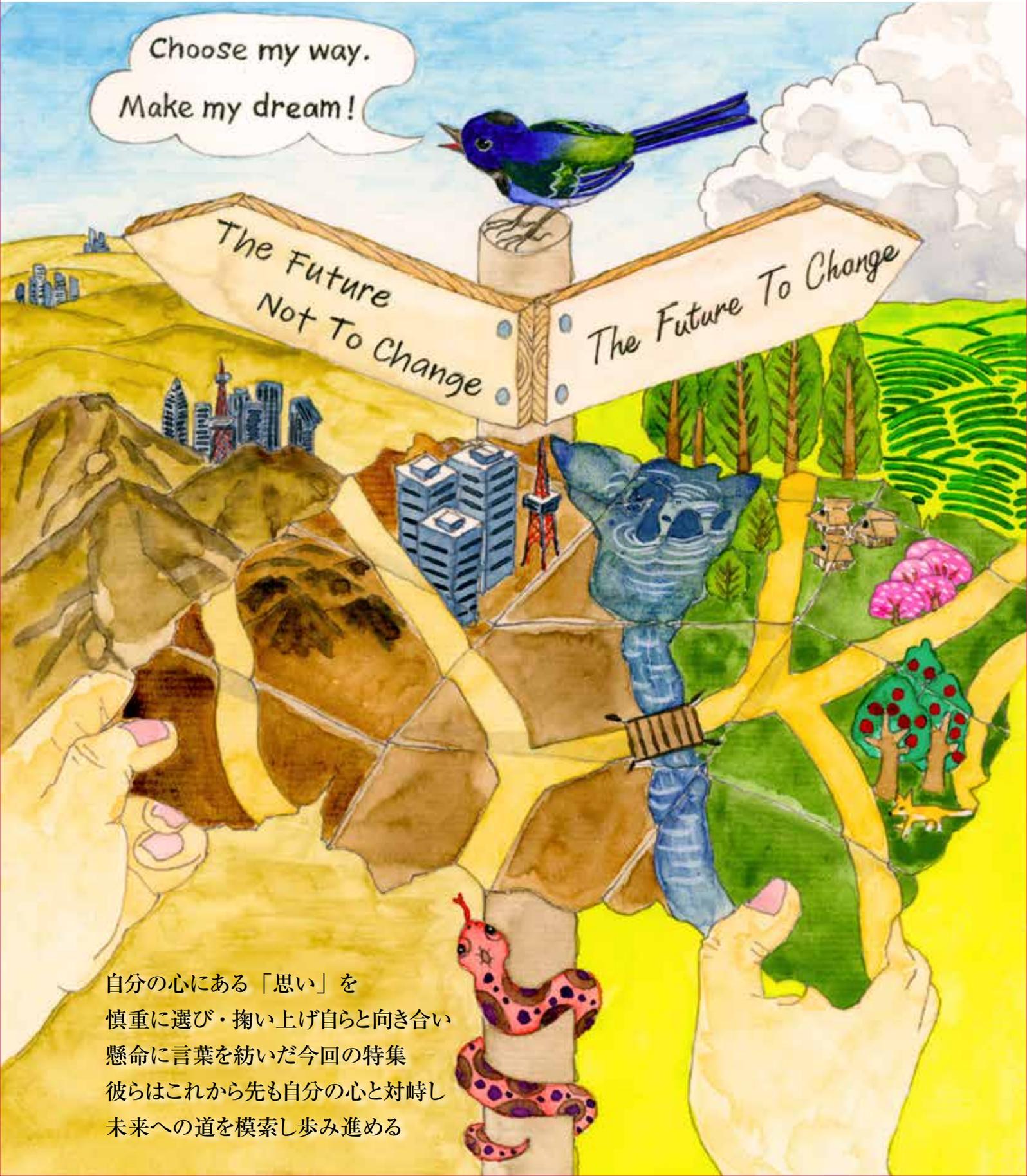




オアシス

第 30 号
令和 4 年
3 . 1



自分の心にある「思い」を
慎重に選び・掬い上げ自らと向き合い
懸命に言葉を紡いだ今回の特集
彼らはこれから先も自分の心と対峙し
未来への道を模索し歩み進める

今回の特集は、中学生による「少年の主張」の場をオアシスに移し、紹介しています。一人ひとりのテーマに違いはありますが、紙面からは彼らの力強い主張が伝わってくると思います。本号の表紙にあるように、人生の岐路に立った時歩みを止め、物事と向き合った上で、自らが選び進むしかありません。失敗を恐れず、挑戦を諦めないで、そんな経験を重ねることが糧となり明日へ進む力になるのではないのでしょうか。未来への道を、自分自身の手で決定できる力強さが育つことを期待しています。

各中学校の作文は昨年の夏頃に書かれたものです

人間と資源

秋月中学校 二年 舟木 嘉信



この前、学校で調べ学習をしていると、パラジウムやロジウムといった金属の取り引き価格が高くなっているというニュースを見ました。僕はあまり聞いたことのない名前だったので性質や価格がなぜ高くなっているのか気になったので調べてみました。

まず、パラジウムやロジウムは白金という白金に似た性質をもつ金属であり、どちらも希少な金属であるそうです。そしてロジウムは硬くて強い光沢があり、腐食に強く装飾品などのメッキとしてや、自動車の排気ガスをキレイに分解する触媒として使われているそうです。パラジウムも光沢があり腐食に強く、水素を吸収する性質があり、パラジウムの体積の九百倍もの量を吸うため将来の水素社会での利用が期待されていたりロジウムと同様、排気ガスをキレイにする触媒でもあるそうです。

次にパラジウムやロジウムなどの価格が高くなっている原因は、もともと希少性が高くとれる国もとても偏っているのに加え、排気ガスをキレイにする触媒であるという性質をどちらとも持っているため、パラジウムは需要の八割がガソリン車の触媒用途でありヨーロッパでは環境規制が進みもともと供給不足であったのにさらに需要が増加しているためパラジウムの価格が高くなった原因になっています。パラジウムの供給不足にともなってロジウムの価格も高くなりました。それに新型コロナウイルスの影響で国外への飛行機の移動が難しくなったのも価格が

高くなっているのに拍車をかけていると言えます。パラジウムは触媒など以外にも銀歯の材料にも使用されているため、歯科医師の人たちや銀歯が必要な人たちは困ってしまうのではないかと思います。しかも、水素を吸収する性質があるため地球温暖化が注目されているので、水素社会の利用に期待されているけど、一つの環境問題を解決するために限りある資源を使うのは新しい環境問題を引き起こしてしまうのではないかと思います。今、新型コロナウイルスが世界中で流行している中、医療が注目されているけど医療が進めば必要な資源は増える一方なのでうまく両立させていくべきなのではないかと思いました。

僕は金属など科学の分野に興味を持っていたのでこの話題を取り上げましたが、みんなあまり見たり聞いたりしないニュースだと思います。

今、地球温暖化が進んでいるということで国際的に対策が取り組まれていてとても良いことだと思いますが、代わりにレアメタルなどの希少な資源を多く使用することや、資源を得るために森林を伐採して新たに土地を開発することは、地球温暖化の解決には至らないと思います。機械化が進んでいる中で、レアメタルなどに関わりを持つ機会はみんな増えてくると思うので、資源を無駄にせずリサイクルなどをして少しでも未来がよりよくなるような行動をしたいです。

未来への優しさ

南陵中学校 二年 草場 実咲

「おじいちゃん」

私は叫んだ。しかし、ひいおじいちゃんの返事はない。私は全てを悟って、大粒の涙を流した後、心が空っぽになったようにリビングに立っていた。

私は、両親と祖父母、ひいおじいちゃんの四世代で住んでいた。ひいおじいちゃんは認知症になっていた。だから、数分前に言ったことをまた言うてくる。

それが、日常になっていた。相手をするのは私。正直うんざりしていた。何回も同じことを言うのでひいおじいちゃんへの態度は日に日に適当になっていった。自分でも、適当に返すのは良くないと思っていたけど、イライラしてつい当たってしまっていた。

ある日、ひいおじいちゃんが何度も咳をして少し苦しそうだったので、かかりつけの病院の先生に家に来てもらった。診てもらうと、ひいおじいちゃんの肺に水がたまっているとのことだった。すぐに入院した。コロナウイルスの影響でお見舞いに行くことさえできなかった。これまで毎日のようにイライラしていた私は、ひいおじいちゃんがない家に何か物足りなさを感じていた。

ひいおじいちゃんは、こだわりが強く、栄養があっても味が薄い病院食は食べなかったため、特別に許可をもらい、昼食だけは祖母が毎日作って行き食べさせた。

入院して、2・3週間が経った頃、ひいおじいちゃんが退院する話を聞いた。しかし、その知らせは決して嬉しいものではなく、もうすぐ亡くなるかもしれないので、家で最期を看取するということで退院したのだった。ひいおじいちゃんは立つこともできないようになっていたので、ベッドのまま乗ることができる介護タクシーで帰ってきた。私はその様子を2階の窓から見ていた。細い腕に刺された数か所の赤紫色になった点滴の跡、前より細くなった体。目を背けようとした。しかし、これまでやってきたひどいことを償うのは、今しかないと思い祖母と一緒に一生懸命介護を頑張った。ご飯もまともに食べることができず、やわらかいアイスクリーム

などを毎日食べさせた。いつしか、たんが喉にからまって、声も発せなくなっていた。

ある日、2歳のいとこが家に遊びに来ていて話すことができないひいおじいちゃんとニコニコしながら人形で遊んだり、いとこのお母さんと一緒に話しかけたりしていた。いとこが帰って夜ご飯を祖母と一緒に食べさせていたときのこと。

ひいおじいちゃんがいつも以上にきついと言っていたので、背中をさすったり、手をさすったりして食べさせた。祖母が

「おじいちゃん、口を開けて」

と言ったが、返事がない。異変を感じた祖母と私は家族に相談して病院の先生を呼んだ。父が酸素吸入器を買いに行っている間に、病院の先生が来て、容体は安定した。

しかし、先生が帰った後、家族全員に

「おじいちゃん」「ありがとう」

と言われながら息を引き取った。百歳だった。

いとこのお母さんはその日に会っていたため信じられない様子だった。ひいおじいちゃんは高校の先生や保育園の園長先生をしていたため教え子がたくさん集まった。みんな泣いていたし私も血の涙が出るくらい泣いた。

私は、今もこの文を書くだけで涙が出てくる。このような思いをした人は少なくないのではないだろうか。過去は変えられないので、後悔し続ける。しかし、未来は変えることができる。毎日、人に優しくしようと意識することで、今いる周りの人を大切にできるのではないだろうか。私はそう思って、毎日を過ごしている。



ハンセン病とコロナから 考える差別

比良松中学校 三年 佐藤 澄空



私が、「ハンセン病」という病気を知ったのは、興味本位でのぞいた、とある動画の「ハンセン病の差別」という言葉からだ。差別、という単語から調べてみると、ハンセン病は皮膚におきる感染症だが、感染力がとて弱く、人の免疫ではほぼ発病することがないとても弱い病気だった。だが、昔の人は感染症だ顔などがひどい状態になるから、この病気は凶悪だ、とまだ不確かな情報だけでハンセン病の人を差別したそう。私はそこまで見て、なんだか少しコロナ差別と似ているな、と思った。コロナでも感染した人への差別それだけではなく、コロナが治った人やその家族、さらには医療従事者に対しても差別があり、ニュースでもコロナ差別、ネット差別と騒がれていた。

だが、コロナ差別よりもひどいと思ったのがハンセン病感染者に対する国の対応だ。なんと国はハンセン病は恐ろしい伝染病であると広め、およそ九十年の間、必要のない隔離政策を続けたのだ。この政策によって、感染者に対する偏見や差別が助長されていった。偏見・差別の被害にあったのは、感染者だけでなくその家族もだった。ある人は「病気の子」や「そばにいたら菌がうつる」などと言われ、飼犬が殺されたこともあったそう。さらにある人は、就職のため面接試験を受けたとき、「家族がハンセン病だ」と言う試験に落ち、結婚する時も、相手に隠していかないといけなかったそう。そのため、家族に迷惑がかかることを心配し、本名や戸籍を捨てた人もいたそう。これを読んだとき、私は思わず顔をしかめてしまった。だがそれと同時に、コロナとのある共通点に気づいた。それは「無知」だ。

ハンセン病は当初、どういう病気なのか、どうやって感染するのかがわかっておらず、治療薬もなかった。そのため差別の対象となり、ひどい差別や隔離を受けた。私はコロナ差別や他の差別にもこれがあてはまると思った。コロナ差別でも、最初是对処するための情報やワクチンがなかったから、かかったらどうなるのか、という恐怖から、必要以上に相手を拒否したり、SNS で相手を攻撃したりするのだと思った。

私はこの「無知」による恐怖は呪害や「心霊現象」に対する恐怖と似ているな、と思った。昔から妖怪などは正体がよくわからないことから、「怖い」と思う人は一定以上いる。それと同じで、「よく分からないものは怖い」となるのだと思う。だが、妖怪と違うのは、私たち人間は、体を持ち、意思を持っているということだ。実体がある分、攻撃をすれば傷つき、心に受けた傷や痛みは二度と消えることはない。そこにいるなら攻撃しておかないと危険だと思う人はいるかもしれないが、それがいじめ、差別につながっていくのだと思った。

これからも、新しい病気が出て、また差別やいじめが起こるかもしれない。そういうときは、どこから出たかわからない目先の情報にとらわれず、ツイッターやインスタグラムで調べるだけでなく、ニュースを見たり新聞を読んだりして、友人や家族と正しい情報を共有することが大切だと思う。

ただ、私一人が正しい情報を知ることができても病気にかかっている人に対する差別や差別心を完全になくすことは難しいと思う。だからこそ、一人ひとりが正しい情報を知り、広め、「差別をすること」が、相手にどんな影響を与えるのかを考え、偏見、差別、先入観をなくしていく必要があると思う。

どんなことでも、自分から一歩をふみだし、行動を起こすことは、とても勇気がいることだし、大変なことだ。でも、その一歩が世界が変わる、大きな一歩だと考えるとどうだろうか。今でも、人種差別、部落差別、他にも性別や言葉、宗教の違い、障害の有無での差別やいじめは世界的に強く根づいている。私たちの周りや身近なところでも、今、いじめがおこっているかもしれない。

今回、ハンセン病とコロナから「差別」について考えてみて、差別の根本に「無知」「無関心」があることに気付いた。このことから私は、まず身の周りにいる友達や、これから出会う人たちのことを知りきちんと理解していきたいと思った。そうすることで悩みや不安を抱えている人に手を差し伸べたり、笑顔にしたりすることができると思うからだ。私は、そんな一歩を踏み出せる人間になっていきたい。

世界がつながる

十文字中学校 三年 岩下 一愛



みなさんは「在日朝鮮人」という言葉を聞いたことがありますか。在日朝鮮人とは、日本に在留する韓国・朝鮮籍の特別永住者を指す言葉です。日本では悲しいことに日本に住む朝鮮人やその他の国の人に対してよく思っていない人がたくさんいます。しかし、日本に住む外国の方も私たちと同じ人間であり、同じ心をもっているのです。差別によって苦しんでいる人を助けるにはどうすれば良いのか私は在日朝鮮人と呼ばれる人達に着目して私たちには何ができるのか考えました。

まず最初に私が考えたことは、相手に対する「偏見」を持たないということです。在日朝鮮人の多くの方は生まれた国による偏見により差別されていると感じるそうです。偏見をなくしていくためには今までとは違う見方をすることや受け入れられる気持ちが大切だと思います。今までとは違う見方とはどのようなことでしょうか。私は、その人の生まれた場所や肩書きなどで判断せずに一人の人間として向き合うことだと思います。一人の人間として向き合うことで相手の性格や個性を理解することができます。そして文化の違いや個性を受け入れられたら相手も心を開いてくれるはずです。

次に私が考えたことは、お互いに助け合い、自分と同じくらい相手のことを大事にするということです。しかし、「助ける」というのはとても勇気がいることで中々実践できることではありません。また「助けられる」というのも同じくらい勇気がいることだと思います。ですが、勇気をだして助け合うことができたなら私たちは信頼関係などお互いにとって良い関係を築くことができます。

今、話題となっている「東京オリンピックパラリンピック」ではたくさんの国の人が参加し活躍しています。たくさんの選手が、「絶対に勝ちたい」「あきらめない」という気持ちを持ち、正々堂々と戦う姿はとても輝いて見えます。そして試合が終わった後お互いに感謝を伝え、握手したりお辞儀したりする場面は多くの人に感動を与えたと

思います。私はオリンピックを見た時、スポーツを通していろんな国の人と交流することはとても素晴らしいと感じました。また選手のお互いを大事にしてリスペクトし合う姿から改めて、お互いを大事にする大切さを学びました。グローバル化や、多様性が重要視されている今、日本では英語の学習が強化されています。しかし、日本語だけ話せば良いと思う人もたくさんいると思います。ですが、これからもっと日本で働く外国の人が増加した時、日本語だけでコミュニケーションをとるのは難しいと思います。なので私はいろんな人と仲良くするために今以上に英語の学習を頑張りたいです。また、海外の映画や音楽、食文化などいろんな国の独自の文化に興味をもっているため英語以外の言語にも触れていきたいです。

今、日本の街はたくさんの英語、韓国語、中国語などであふれています。例えば看板や飲食店のメニュー表などです。このような取り組みはグローバル化にも対応しているし、多くの外国人の手助けをすることができます。これからもいろんな人が使いやすい日本の街づくりが広まって、日本だけでなく外国のいろんな場所にも広まってほしいと思いました。

このように、今までとは違う考えを持ち、お互いのことを理解し合うことで差別のない平和な未来を創っていく第一歩が踏み出せるのではないのでしょうか。

外国の文化に目を向けてみたり、オリンピックを「平和の祭典」という視点で見たりするだけで私たちは、今までとは違う考えを持つことができます。一人一人が今までより積極的に差別や平和について考えられたらうれしいです。

私は今回改めて差別について考えてみて、より一層差別をなくしたいという思いが強くなりました。そして、これから私はよりよい社会を創っていく一員として意味のある行動をしていきたいです。

水による格差

杷木中学校 三年 諫山 澄人



平成二十九年七月、未曾有の豪雨により、一夜にして僕たちの町は一変してしまった。浄水場は壊滅的な打撃を受けてしまい、杷木地区一帯は断水に見舞われることとなってしまった。風呂や洗濯は当然のことながら、水洗トイレさえも使用することができず毎日自衛隊の給水車までタンクを持って行って水をもらうこととなった。

通常、家庭で一人が一日に使用する水の量は平均して二百四リットル程であるという。給水車で水を分けてもらった際に使用したタンク一つですら非常に重く、大変な思いをしながら運んだが、このタンクを毎日十個以上も使っていると考えると、水道というものが如何に素晴らしいものであるかということ、ずっと普通のことだと思いながら使っていた水が、どれ程までに大切に生活を支えてくれていたかということを感じさせられた。そして、それと同時に僕たちは水がなければ生きていくことはできないということも身に染みて感じた。

僕の祖父の家は、川沿いにあり、小さかった頃はしばしば魚を取りに連れて行ってもらった。また、六月になると、田植えの手伝いのために田んぼに行くが山から流れてきている水は枯れることなく絶えず田んぼへと注がれている。このように、ずっと身近に水を感じながら生活を送ってきたために、水は人が生きていく上で平等なものだと思っていた。

しかし、あるテレビの番組で見た子どもたちは生活に必要な水を得るために毎日二時間以上も往復していた。生命を維持するためには必要不可欠である水が、世界中で平等とは言えないという事実を知った。

その上、世界には、そのような状況におかれている人たちが九億人以上もいるという。そして、水を汲みに行くのは、子どもや女性であり、水汲みに行くために学校に行って学習する時間を奪われてしまっている子どもたちや、仕事に就く機会を奪われてしまっている女性たちがたくさんいることも知った。

よく「水の惑星」と言われるこの地球上には約十三垓五千京リットルもの水があるそうだが、表面

を覆っている七十パーセントの水のうち、九十七・五パーセントは塩水で、淡水は残りのわずかに二・五パーセント程しかないという。

水は、生命を維持するために非常に大切なものであるが、服や体を洗うためにも必要である。汚れたままの服や体で生活すると、病気になってしまう等健康を損なうことにもつながってしまう。文化的な生活をするためにも水は必要不可欠なものである。

日本では、水道施設が整っているのだから、蛇口をひねるだけで簡単に水を使用することができる。しかし海外に目を向けると、国によっては水道施設がしっかりと整っていないところもあるため、高額なお金を請求されてしまう人もいようである。これでは水を得ることに対し、ますます格差が大きくなってしまふ。国によっては、海水を淡水化するような施設もあるようだが、その施設の設置には多額の費用がかかるので、やはり、ここにも格差が生じてしまふ。しかも、生命の維持に必要な水を得るために争い、結果人の命を奪うということもしばしば行われているという。

祖父の家の近くには、二人の庄屋が祀られている神社がある。その昔、水が必要な場所に川から水を引くために穴を掘って水路をつくり上げ、それによって多くの人たちが助かったという。そのためその庄屋たちが祀られているそうだが、水は、人々の生活の基盤となるものだということが、この話からもよく分かる。この話のような、先人たちの知恵や技術を学ぶことによって、世界中の困っている多くの人たちを助けることができるのではないかと考える。あの中村哲氏が、アフガニスタンでやったように…。そうすることで、水のために命が奪われるということや、水汲みのために時間や労力を割く必要をなくし、現在生じている様々な格差や、それに起因する問題を解消できるのではないかと…。今後も考えていきたいと思う。

「地球温暖化」に 思うこと

甘木中学校 三年 信國 はな



みなさんは、私たちが住む地球の環境についてどう考えていますか。今、地球温暖化が進んでいると言われていています。世界全体で気温が上昇の傾向にあるのです。今年、6月29日、日本よりも北の国、カナダで、驚くような高い気温が記録されました。みなさん、その気温は何度だったと思いますか？ 気温は49.5度を記録したそうです。

全体的に寒い気候のカナダでは冷房設備のない住宅が多く、体調を崩す人がたくさん、出たそうです。赤道付近ではないカナダがこのような高い気温になることは、考えにくいことだと、私は思います。そして、それと同時に不安になります。

私たちの体は40度近い気温に適応していけるのか、今の生活の仕方で大丈夫なのか、これから先地球に住めるのか、など、いろいろな考えが出てきます。気温が上昇すると、北極の氷が溶けます。すると、海の水位が上がり、海の中に沈んでしまう国や島が出てきたりするそうです。また、北極の氷が溶けると、氷の下に眠っていたウイルスが外に出てきて病気の流行につながるそうです。

そもそも、地球温暖化の原因は何なのか。よく言われるのが、二酸化炭素の増加です。物が燃えるときには、酸素が必要であり、二酸化炭素が出されます。人が息をするときには、酸素を吸い二酸化炭素を吐きます。しかし、植物は逆に二酸化炭素を吸って、酸素をはいてくれる光合成を行っています。これは素晴らしいので、すごい

ことだと思います。なぜなら人が生きていく上で必要な酸素を出してくれるからです。人は、酸素をつくることができません。だから、植物をたくさん植えれば改善される、と私は考えたのですが、日本でも農地開拓や産業発展のために、森林伐採が行われているのも事実です。さて、地球温暖化の原因の一つに、自然を汚してしまっただけで関係している、と私は思います。地球温暖化がさらに進む中で私たちが行うことは、やはり地球を大切に思うことではないかと考えます。環境に優しいものをどれだけ使うのか、水の汚れをどれだけ最小限に抑えるのか、一人ひとりが地球のことを考えて行動すると、地球の未来は少しずつ明るくなるのではないのでしょうか。人が生きていく上で二酸化炭素を出さないことは不可能です。だから、遺伝子を組み換えて人のつくりを進化させるのではなく、人の行動を、改めていくのです。「地球温暖化」がひどくならないように、ゴミのポイ捨てをせず去年から始まった買い物のマイバック化を続けたり、分別を心がけたり、私たち中学生ができることは、いろいろとあると思うのです。私たちが住むこの地球ほど、水と空気、そして気候が優れた星はありません。私は、これから先の地球の未来を考え、責任ある行動をしていきたいと思っています。

子ども達から見たこの世界は、息をのむような新鮮な美しさばかりでなく、様々な矛盾や理不尽な出来事もあります。それは自然の営みであり、また人の生み出した闇であったりもします。難しいのはそれが分かりやすい善と悪や美と醜というように、対比的なものであるより、相対的で混然一体と複雑に絡まっていることの方が多いということです。

成長するというのは、一つにはこうした物事を自分なりに解釈するその土台を作っていくことにあります。そしてそれは徳性に基づくものであるべきです。

オアシスは青少年の健全育成を応援しています。

毎号様々な工夫、構成を心がけています。勿論表紙もそうです。それを自由に解釈して戴きたいのですが、もし内容や作画の意図にご意見等ございましたらご遠慮なくおっしゃって下さい。

朝倉市青少年育成市民会議では賛助会員を募集しています。

—未来の朝倉市を担う子ども達をあなたの手で—

朝倉市青少年育成市民会議では、活動を財政面でサポートしていただく賛助会員を募集しています。

朝倉市の子ども達をいきいきと健やかに育てるための活動にご参加ください。

それぞれの立場で、得意の分野で、さまざまな形で子ども達を見つめ、支えてください。

入会の手続き

会費の納入によって、自動的に会員名簿に登録されます。いずれかの口座に納入いただくか市民会議事務局に直接ご持参ください。

【銀行振込みの場合】

朝倉市青少年育成市民会議
筑前あさくら農業協同組合 甘木中央支店
普通預金口座番号 5321182

●ありがとうございました● (賛助会員、敬称略、順不同)
【団体・法人】

三奈木地区民生委員児童委員協議会
医療法人かつき会香病院
株四ヶ所

(令和3年11月1日～令和3年12月31日時点)

ご協力いただく会費の年額

賛助会員(個人)	1□	1,000円
賛助会員(団体)	1□	3,000円
賛助会員(法人)	1□	10,000円
特別賛助会員(法人)	1□	50,000円

団体・法人の賛助会員には市民会議日より「オアシス」をお届けします。また市民会議の活動の折に触れ、賛助会員であることの周知を行うとともに、県民会議の顕彰に推薦されることがあります。

ご不明な点などありましたら、下記事務局までお問い合わせ下さい。
(e-mailでも可能です)
danjo@city.asakura.lg.jp



穴あけが必要な場合は△を中心にお開けください。



自閉症の僕が跳びはねる理由

会話のできない中学生がつづる内なる心

巻末：短編小説「側にいるから」

著者：東田 直樹 出版社：エスコアール

自閉症の障がいのある中学生の著者がどうしたら人とコミュニケーションが取れるのだろうと訓練をして、パソコンで原稿が書けるようになり出版された本です。又高校生になり続編が出版されました。



私たちが暮らしている社会には身体・知的・精神等の障がいがある方達と共に生活をしています。すべての人が障がいの特性を理解して、その人の個性と捉えて、暮らしやすい社会になりたいですね。

自閉症は決してわがままや自分勝手からきているものではないことを、みなさんに理解してもらいたいです。

「どんなに苦しくても悲しくても、希望があれば頑張れます。この世界が希望の光でいっぱいになれば、僕たちの未来はみんなの未来とつながると思います。僕は、それを望んでいるのです。」

編集後記

言葉には力がある。伝える人の意志がある。技巧に凝った文章でなくても、伝えたい思いの表現が稚拙でも必死に心に湧いてくる思いを何とか伝えようと悶えながら絞りだした言葉の雫が、ひとたび文字に落ちた瞬間から、言葉は力を持つ。文字は言葉として命を持つのだ。

命を持った言葉は、それを目にした瞬間、真直ぐ心に向けて突き進んでくる。その避けがたい波紋は、繰り返しながら、自分の理性を試すかのように待ち望んでいた真実の答えを伝えるように、激しくそして穏やかにそれぞれの読者の胸に収まろうとする。

その時、微妙な違いを持ちながら、言葉は新たな命を持つのだ。

だから、読者はそれを見逃してはいけない。